

琉球大学学術リポジトリ

フィールドの動態性と混濁性の捉えるー「流れ」と「渦」という観点から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2014-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川端, 浩平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/28214

フィールドの動態性と混濁性を捉える—— 「流れ」と「渦」という観点から

Illuminating the Liquidity and Hybridity of the Field: From the Perspective
of 'Flow' and 'Whirlpool'

川 端 浩 平*
Kohei KAWABATA

2002年の夏から出身地である岡山中で参与観察と聞き取り調査をベースとしたフィールドワークを行ってきた。その主な研究対象は在日コリアン、被差別部落関係者、ホームレスの若者など、いわゆるマイノリティと呼ばれる人びとだ。報告者自身の関心は、彼／彼女らの帰属意識とその変容、とくに非集住的な環境で育った若い世代の日常生活における差別／排除をめぐるリアリティを批判的に考察してみることにあった。そして、参与観察と聞き取り調査でえられたデータをもとに、彼／彼女らを取りまく日常性のリアリティをより効果的に描き出すためにエスノグラフィという手法によって記述して論稿としてまとめた。学術的なあるいは科学的な観点から筆者の研究調査を一言でまとめるとするならば、——地方都市で生活するマイノリティの帰属意識と差別・排除をめぐる質的研究に関するエスノグラフィ——ということになるだろう。

一般的な感覚からすれば、このような調査は不可視化されやすいミクロな次元の社会問題を科学的に考察するための有効な手法かも知れない。とはいえ、ここには地域の特性（地方都市）や対象者の属性（在日コリアンなど）といったカテゴリーを実体化するような境界線も明確に設定されている。この舞台設定によって、読者は記述された人びとや彼／彼女らが生きる舞台となる場所をめぐる時空間を想像することが可能となる。つまり、そのような人びとと場所をめぐる時空間に対する想像力を担保することによって、調査者が描き出したフィールドというものを追体験することになる。

しかし、そのようなカテゴリー化された人びとや地理的な境界線は、知的な認識枠組みを反映したものであり、そこで生活する人びとの認識やリアリティとは乖離したものである。そしてまた、フィールドで生活する人びとや場所もまた常に変化するものであり、調査者と対象者や彼／彼女らを取りまくフィールドというものも変容していく。そこで本研究会で検討したのは、フィールドワークや社会調査において、いかにしてこのようなフィールドにおける調査者／対象者・対象地域をめぐる動態的な関係性を捉えていくことができるのかという、オルタナティブな方向性を検討してみることである。報告者はこれまでそのような地域社会の動態的リアリティを考察するためのアプローチとして、ジモトという視座から考察を深めてきた（川端 2013）。そのなかでも本報告において眼目を置いたのは、調査対象者が生活する舞台として設定される地域社会という場所を考察するうえで、同時代的な価値観によって可視化される現実を批判的に問い直すことの重要性と、いかなるアプローチを用いることによって静態的な地域表象やそこから生み出されるステレオタイプを乗り越えることができるのかについてであった。

同時代的な価値観によって可視化される現実——すなわち「同時代感覚」(Coevalness) を肯定することによってフィールドを描き出すこと (Fabian 1983) ——は、そこで生活している人びとの動態的な営みを現状肯定的＝静態的に捉えることに陥ってしまう。この場合、人びとは場所の持つ同時代的なイメー

* 関西学院大学先端社会研究所

ジに従属し、彼／彼女らの日常実践の営みは後景化してしまう。たとえば再開発やまちづくりといった、グローバル化によって促進される地域のイメージ戦略の背景にある場所の論理においては、地域間の差異が魅力として外部に発信するために定式化されている。あらかじめ地域のイメージには差異が定式化されているゆえに、実際の場所においての人びとの無数の営みはその内部に埋め込まれることになる。

ここに、地域と人びとの関係性の逆転現象を見てとることができる。そもそも地域とは、人びとの日常実践が営まれる場所が幾層にも交錯するなかで成立しているものである。ただし、戦略的な地域イメージにおいては、現実とは乖離した均質的で非流動的な地域が設定される。このような資本の論理によって形成された地域イメージをめぐる社会的な合意に依存するのではなく、フィールドワーカーが実際に歩き、観察し、思考する時空間を動的に捉えるためには地域というものをいかに捉えることができるだろうか。

ここでその一つの手がかりとしてみたいのは、テッサ・モーリス＝スズキの提唱する「流れ」と「渦」という地域を捉える発想である。モーリス＝スズキは、「反地域研究」(Anti-Area Studies)という立場から「地域研究」が切り開いた理解のための空間的枠組み——すなわち「地域」という発想——が、現代の世界システムの性格を、可視的で理解可能なものにするよりも、ある面では障害となっている」と述べている(モーリス＝スズキ 2000=2005)。彼女によれば、地域研究(Area Studies)において地域は、物理的地理と環境に包含され共有された文化によって定義される空間として静的な認識から理解されてきた。これに対して彼女が提唱する「液状化する地域研究」という視座における地域とは、旅行や通商やコミュニケーションといった人間の活動によってのみ存在し、地理的な基層に埋め込まれた固定的なものではなく、絶え間ない運動や変化によってのみ形作られる噴水のようなものである。

ゆえに、地域という領域を確定する地理的な境界や文化を形成する環境条件を探求することから始めるのではなく、人間の相互作用に関わる二つの要素に注目する必要があると説いている。その二つの要素とは、社会的集団同士を結びつける人やモノや観念の動きである「流れ」と、その複数の「流れ」が交じり合う場所としての「渦」である。モーリス＝スズキによればそこは、社会的および文化的な相互作用が渦を巻いているような場所である(モーリス＝スズキ 2009)。ここに公定言説における地域イメージによって包摂／排除されるという二元論に回収されることのない、場所と人びとの営みを捉える地平を見出すことができるだろう。つまり、同時代的な感覚＝「流れ」を地域イメージと連続的に結びつけて固定化するのではなく、人びとの営みが複雑に交錯する「渦」として理解することが可能となるのである。

今回研究会において報告したこの「流れ」と「渦」の概念を、エスノグラフィの舞台設定(場所)や対象者との関係性を踏まえて記述として落とし込んでいくことが、報告者の今後の課題としてあげられる。

参考文献

- Fabian, J., 1983. *Time and Other: How Anthropology Makes Its Object*. Columbia University Press.
- 川端浩平、2013、『ジモトを歩く——身近な世界のエスノグラフィ』御茶の水書房。
- Morris-Suzuki, T., 2000. "Anti-Area Studies." *Communal/Plural* 8(1): 9-23 (=2005、テッサ・モーリス＝スズキ、伊藤茂訳、「反地域研究——アメリカ的アプローチへの批判」『地域研究』(人間文化研究機構国立民族学博物館地域研究企画交流センター) vol.7 No.1 : 68-89.
- Morris-Suzuki, T., 2009、「液状化する地域研究——移動のなかの北東アジア」『多言語多文化——実践と研究』 vol.2 : 4-25.